

# 岩手・宮城内陸地震 10年

# 地域再生へ 今なお模索

## 地震発生から10年の歩み

### 【2008年】

- 6月14日 岩手県内陸南部を震源に地震が発生し、栗原、奥州市で最大震度6強を観測。栗駒山麓の荒砥沢ダム上流部で国内最大級とされる大規模地滑りをはじめ、土石流や崖崩れなどを引き起こした
- 7月4日 政府が一関、奥州、栗原の3市を対象にした「局地震甚災害」指定を閣議決定

### 【09年】

- 5月10日 一関市の須川高原温泉の登山口で栗駒山の山開き
- 11月30日 栗原市栗駒耕英の温泉宿泊施設「ハイルザーム栗駒」が営業を再開

### 【10年】

- 4月1日 同市花山の国史跡「仙台藩花山村寒湯番所跡」の一般公開を再開
- 5月30日 国道342号の一関市厳美町真湯―須川高原温泉間(約15km)が開通
- 8月 行方不明者6人の捜索を事実上終了
- 9月17日 栗原市栗駒の県道築館栗駒公園線(6.6km)の規制が解除され、18日には同市と湯沢市を結ぶ国道398号が全線開通
- 12月18日 地震で崩落した国道342号の祭時大橋の新橋(一関市)が完成し、開通

### 【11年】

- 3月11日 東日本大震災、東京電力福島第1原発事故が発生。栗原市で最大震度7を記録
- 4月24日 29日 内陸地震で休校となった同市栗駒小耕英分校で閉校式。最後に残った同市花山の1世帯5人への避難勧告を解除
- 7月7日 栗駒山を取り囲む栗原市、一関市、湯沢市、秋田県東成瀬村が共同で広域観光を推進する連絡協議の設立協定を締結
- 11月9日 栗原市花山、栗駒両地区に市が設立した慰霊碑の除幕式を実施

### 【12年】

- 4月28日 同市の市道荒砥沢線(4.1km)が復旧。被害があった栗駒山麓の市道が全線開通

### 【13年】

- 8月11日 栗駒山(1626m)の登山道「表掛コース」の使用を再開。9月14日には「裏掛コース」も可能に

### 【15年】

- 4月16日 栗原市が内陸地震による大規模崩落地を中心に、市内の地形などを防災教育や学術研究に活用する自然公園として「栗原山麓ジオパーク構想」の認定を日本ジオパーク委員会に申請
- 9月4日 日本ジオパーク委が栗原市の構想を認定。対象は栗駒山から伊豆沼・内沼に至る市全域の約800平方km。東北では三陸(青森、岩手、宮城県)などに続き6地域目
- 10月1日 全壊した栗原市の駒の湯温泉が小規模日帰り温泉として営業を再開

### 【16年】

- 11月 国土交通省による堤防新設など岩手、宮城両県の砂防事業が完了



国内最大級の大規模地滑りが発生した栗原市栗駒の荒砥沢地区。斜面の傾斜は約130度、崩れ際の落差は最大150mに及ぶ。10年が経過した今も、山肌はむき出しになっている(13日)

岩手・宮城内陸地震 2008年6月14日午前8時43分、岩手県内陸南部の深さ8kmで発生した内陸直下型地震。マグニチュード(M)は7.2。栗原市で行業客や旅館従業員ら13人、一関、奥州、仙台、いわきの各市で各1人が死亡。宮城で4人、秋田県で2人が行方不明になった。このうち栗駒市栗駒耕英地区の旅館「駒の湯温泉」では、宿泊客や従業員ら7人が犠牲になった。住宅の被害は全壊30棟、半壊146棟、一部損壊2521棟に上った。宮城、岩手両県の計176世帯488人に避難指示・勧告が出た。被害総額は宮城1094億6246万円、岩手209億6032万円。山間部への立ち入りが規制され、農業や宿泊施設を営む住民の収入が途絶えた。

17人が死亡、6人が行方不明になった2008年の岩手・宮城内陸地震から10年を迎える。大規模な地滑りや土砂崩れ、壊れた道路などの復旧はおおむね完了したが、栗駒山麓に暮らす人々の暮らしや観光を柱にした地域再生への模索は、今なお続く。被災地の復旧と復興に向けた足取りを振り返る。



## 発生仕組み 学び備える



栗駒山麓を直撃した内陸地震の記憶をどう共有し、次世代につなげていくのか。栗原市では、栗駒山麓ジオパークを活用した防災・減災教育が、風化防止の一役を担う。6月4日、地元の一迫小4年の児童47人が、総合的な学習の時間を利用して自然観光パンフレットを作成しようと、国内最

### 風化防止へジオパーク活用

栗駒山麓を直撃した内陸地震の記憶をどう共有し、次世代につなげていくのか。栗原市では、栗駒山麓ジオパークを活用した防災・減災教育が、風化防止の一役を担う。6月4日、地元の一迫小4年の児童47人が、総合的な学習の時間を利用して自然観光パンフレットを作成しようと、国内最

## 復興の鍵は情報の扱い

内陸地震で13人が死亡、4人が行方不明になった栗原市。国内最大級の地滑りが発生するなど、前例がない災害に対応する中で見えた教訓とは何か。当時、陣頭指揮を執った佐藤勇前市長に聞いた。

前栗原市長 佐藤勇さんに聞く



情報発信はとにかく力を入れた。市民の声や生活の現状などを整理し、積極的に報道対応をした。被災地の声や現場の空気が

観光再生へ滞在客増図る ツアー・研修受け入れ強化 た。夏山を中心にした栗駒観光の客足は天候に左右されやすく、市田園観光課は夏場の長雨の影響を受け止める。市は本年度中の開設を予定するピジターセンターを核に、ジオパークを活用したツアーや研修の受け入れを強化するなど、広く滞在型観光客の呼び込みを図る考えだ。

内陸地震、東日本大震災と立て続けに大規模災害に見舞われた栗原市が、発展の活路と重視したのが交流人口の拡大だ。ジオパークの認定などで観光客が徐々に増加しつつある中、栗駒山麓では観光再生の波に乗り遅れていない現状もある。2007年に19万人だった栗原の観光客数は、内陸地震があった08年に88万人に半減した。大震災では東京電力福島第1原発事故による風評被害の打撃を受け、11年は77万人まで落ち込んだ。市は13年に観光客数200万を成長戦略の筆頭に掲げ、手厚いPRキャンペーンを展開。ジオパーク認定の追い風もあり、16年には目標超えを果たした。数字上の回復傾向とは別に、栗駒山麓の観光関係者は「多くは日帰り客。売り上げ増にはつながらず(観光客増の)実感はない」と指摘する。内陸地震で最大の被災地となった栗駒耕英地区では、家族連れに人気だったオートキャンプ場が休業。温泉宿泊施設「いこの村栗駒」は解体されて更地になっている。17年の観光客数は187万人(6.6%減)で再び200万人を割り込み、県内7圏域別では唯一のマイナスになった。

への取り組みも学んだ。栗原市では、大規模崩落地を核としたジオパークをフィールドに、現地を体験したり、授業に取り入れて学んだりする取り組みが着実に広がる。官民でつくる栗駒山麓ジオパーク推進協議会によると、2017年度にジオパークと関連した学習会は38回あり、市内内外の小中学校から児童・生徒延べ1848人が参加した。過去5年間で計103回、約6500人による。推進協議会の担当者は「なぜ内陸地震は発生し、周辺では何が起きたのか。現地を訪れてそれを伝えることは、今後の災害から自分の命を守り、風化防止にもつながる」と強調する。

河北新報PR大使をみんなに応援しよう！

各方面で活躍中！

- ★ 伊達武将隊
- ★ ニホンジンプロジェクト
- ★ 仙台弁こけし

仙台から様々なエンターテインメントを発信する会社

**ニホンジンプロジェクト**

http://nihonjin.biz